

## アドラー心理学の基本前提（2）全体論

野田俊作

### 要旨

精神分析学などの自然科学的心理学では、心と体・理性と感情・意識と無意識などの部分を研究する『要素論』的立場をとる。これに対してアドラー心理学は『全体論』の立場をとり、人間全体を統一体としてとらえ、個人を分割できないひとつの単位と考える。部分はすべて全体によって、ライフスタイルすなわち人生の目標へ向かう運動の線に沿って、目的のために使用されるのである。この考え方を『使用の心理学』という。さらにアドラー心理学は個人を『社会』というより大きな統一的な全体に組み込まれたものとみなす。この意味でも全体論的であり、社会の要請に調和した個人の人生の実践のために必要とされるのが『共同体感覚』である。全体論的観点は主に人間学アプローチを行う諸学派や東洋医学で用いられている。全体論とは、病気ではなく、病む人その人を理解しようとする姿勢なのである。

キーワード：アドラー心理学、理論、基本前提、全体論、使用の心理学

### 分割できない個人

人間を頭・胴・腕・脚などの部分に分けてしまうと死んでしまいます。そうして分けた部分をもう一度つないでも、人間は生きかえりません。人間は全体としてひとつの生命体なのであり、部分に分けると最早生きた人間ではなくなってしまうのです。

人間を心と体・理性と感情・意識と無意識などの部分に分けて、その各々の部分を研究しようとするのが、行動主義心理学やフロイトの精神分析学のような、自然科学的心理学です。このように、部分のはたらきを調べて、そうして得られた知識を集めて人間を知ろうとする研究方法を『要素論』または『還元論』といいます。

アドラー心理学はこの考えかたをとりません。部分についての知識をいくら集めても、生きた人間全体はわかりません。人間は心と体・理性と感情・意識と無意識などの部品の寄せ集めではありません。それ以上のものなのです。人間は全体としてひとつの統一体・生命体であり、それ以上は分割できないひとつの単位、まとまりなのです。このように、人間を全体としてひとつの単位とみなして研究しようとする立場を『全体論』といいます。アドラー心理学は全体論の心理学です。

「我々の心理学理論の全体、理解の全体、あるいは個人を理解しようとする努力は、我々が人間はひとつの統一体であると確信できていないのであれば、空虚で無意味なものになってしまうであろう」<sup>[1]</sup>とアドラーは言っています。

## 全体論と目的論

人間は目標に向かって生きてゆきます。これがアドラー心理学の『目的論』の人間観です。さて、個人は全体として目標に向かってゆくのです。心も体も、理性も感情も、意識も無意識も、ひとつになって協力して生きてゆきます。目標に向かう人生の流れ、すなわちライフスタイルに部分がさからうことはないのです。こう考えるのが全体論的な目的論です。

アドラーはこのことについて、「ライフスタイルがすべての表現行動を支配しており、全体が部分を支配している」<sup>[2]</sup>と述べています。フロイト心理学などは、意識と無意識、あるいは自我と衝動の対立の場として人間精神を考えますが、アドラーは「フロイトの精神分析は、心理学の最も基本的な前提をひとつ見逃している。それは、人格の調和的一貫性、個人の全表現行動の統合的不可分性である」<sup>[3]</sup>と言ってこれを非難しています。

一見対立するように見える部分の背後にある一貫した運動を見つけ出すこと、これがアドラー心理学の仕事です。「個人心理学の第一の責務は、この各個人の統一性を証明すること、すなわち、思考・感情・行動をつらぬく、あるいはいわゆる意識と無意識をつらぬく、さらにはその人格の全表現行動をつらぬく統合的不可分性を証明することである。この統一性を、我々はその個人のライフスタイルと呼んでいる」<sup>[4]</sup>とか、「意識と無意識とは同じ方向に協同して働くものであって、しばしば誤解されているような矛盾対立するものではない。さらに、それら二つの間には固定した境界のあるものではない」<sup>[5]</sup>とか、アドラーはいたる所でこのことを強調しています。

## 使用の心理学

部分はすべて、全体によって、ライフスタイルすなわち人生の目標へ向かう運動の線にそって、目的のために使用されます。知能も感情も、そして神経症や精神病の症状も、すべて目的に向かって使用されているのです。この考えかたを『使用の心理学』といいます。

「重要なことは、人が何を持って生まれたかではなく、与えられたものをどう使いこなすかである」<sup>[6]</sup>とアドラーは述べています。

自分の天分や能力を有益で建設的な目的に使用するのが良い人生であり、無益な、あるいは破壊的な目的に使用するのが神経症・精神病あるいは非行・犯罪なのです。このような立場から異常行動を見るのがアドラーの精神病理学です。「患者が自分の症状を利用していることをけっして見落してはならない」<sup>[7]</sup>のです。

## 社会の中の個人

「個人の生活にさきだって共同体がある。人間の文化の歴史において、社会と関係のない孤立したかたちの生活などというものは存在したことがない。人間は『社会の中で』以外のありようでは存在しない」<sup>[8]</sup>とアドラーは書いています。アドラー心理学は、個人を『社会』というより大きな全体の中に有機的に組みこまれたものとみなします。社会は単なる個人の寄せ集めではなく、ひとつの統合的な全体なのです。この意味でもアドラー心理学は全体論的です。社会の要請に調和した個人の人生、それがアドラー心理学の実践的目標です。そのために必要とされるのが『共同体感覚』ですが、これについては別の機会に詳述します。

## 他理論との比較

19世紀末のドイツの哲学者ディルタイが、「自然は（自然科学的に）説明され、精神は（人間的に）了解される」と述べて以来、人間精神の研究に自然科学的アプローチを用いることの限界が認識され、新しい別の研究方法が探究されてきました。アドラー心理学もこの『人間学』的アプローチの中のひとつなのです。

原因論と同じく要素論も自然科学的なもの見かたです。そこで、自然科学の限界をのりこえようとした人間学の諸学派では、目的論と同時に全体論的アプローチをおこなうものが数多くあります。

たとえばホーナイは、ややひかえ目にではありますが、「(フロイトの要素論的思考は)すべての部分品の相互関係がどういふふうにして全体としてのある一定の効果をもたらすのか、なぜひとつの車輪は今ある場所におかれており、なぜそれは今働いているように働くのか、そういうことを理解しようと努めるかわりに、ひとつの車輪から機械全体を理解しようという誘惑をよびおこした」<sup>[9]</sup>と述べて要素論を批判し、全体論を暗に擁護しています。

またビンスヴァンガーは、「(伝統的精神医学の立場に立つ)臨床家として、もちろん、これらの『症例』の中にひとつの秩序を探しもとめている。しかし、彼らは自然科学的・還元論的思考法を使うので、『病気の症状』しか見えなくなってしまう。しかし我々は、人間精神の構造とはたらしの特定の『統一性』に注目する」<sup>[10]</sup>という意味のことを述べています。

これら欧米の学者とは別に、東洋医学も全体論的なもの見かたを用います。辻本は、「東洋医学は『病人を見る』。西洋医学は『病気を診る』」<sup>[11]</sup>と言っています。これとまったく同じことをアドラーは、「犯罪者を見ず、犯罪行為にばかり注目する犯罪心理学などは意味がない。説明されなければならないのは、犯罪者という人間なのであって、けっして犯罪という行為なのではない」<sup>[12]</sup>と言っています。全体論とはすなわち、病気ではなく、病む人その人を理解しようとする姿勢なのです。

## 文献

- [1] *The Science of Living*. (1929) Doubleday 版 p.16. ミネルヴァ和訳版 (『子どものおいたちと心のなりたち』) p.26.
- [2] *Der Sinn des Lebens*. (1933) Fischer 版 p.23.
- [3] *What Life Should Mean to You ?* (1931) Putnam 版 p.96.
- [4] *The Fundamental Views of Individual Psychology*. *International Journal of Individual Psychology*, 1 (1) p.5-8、 1935.
- [5] *The Science of Living*. Douleday 版 p.15.
- [6] *Der Aufbau der Neurose*. *International Zeitschrift für Individual*, 10, p.321-328, 1932.
- [7] *Problem of Neurosis*. (1929) Harper 版 p.13.
- [8] *Menschenkenntnis*. (1927) Hirzel 独文版 p.19, Fischer 独文版 p.38, Allen & Unwin 英訳版 ("Understanding Human Nature") p.28, Fawcett 英訳版 p.35.
- [9] Horney, K.: *New Ways in Psychoanalysis*. (1939) Norton 版 p.70.
- [10] Binswanger, L.: *Schizophrenie*. (1957) 引用は *Souvenir* 英訳版 (*Being-in-the-World*) p.251 の Needleman, J. による英訳よりの意識。みすず和訳版 (『精神分裂病』) p.4 ~ 5.
- [11] 辻本太郎：東洋医学と心身医学。大海作夫編：『現代と心身症』(大阪書籍) p.62 (1983)

Psychology

[12] *The Science of Living*. (1929) Doubleday 版 p.2, ミネルヴァ和訳版 p.2.

#### 更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載